

「学びに向かう力」を育てるペア学習

— 1年国語の授業を通して —

伊藤 幸洋¹⁾・佐藤 年明²⁾

幼稚園からの「自分の思いを言葉で表現できない」という課題を克服するために、小学校1年生で、「ペア学習」に取り組んだ。「ペア学習」を通して、自分の考えに自信を持ったり相手への伝え方を練習したりしながら、話す力・聞く力を高めることをねらっている。2012年度に行なった、1年国語「おむすびころりん」「たぬきの糸車」の研究授業を通して、「やりたい思いを大事にする」「話を聞いてもらう場を設定する」「言葉や表現方法に慣れる」という3点が、1年国語で求められていることが分かった。「小学校入門期」では、「ペア学習」をくり返すことで、子どもたちの「意欲」が高まり、「学びに向かう力」を育てる上で効果的であることを指摘した。(なお本稿の1~4を伊藤が、5を佐藤が分担執筆した。)

キーワード：「学びに向かう力」「ペア学習」「くり返し」「小学校入門期」「意欲」

1 はじめに …幼稚園・保育園からの申し送りを受けての取り組み

以前、小学校1年生で授業が成立しない「小1プロブレム」と呼ばれる現象が問題になっていた。この現象に対して、幼稚園・保育園と小学校との連携強化を通して、小学校生活への円滑な移行の取り組みが進められてきた。

三重県員弁郡東員町では、幼稚園・保育園と小学校、中学校で、授業を見合ったり、研修会で情報を交流し合ったりして、異校種連携を意識した教育活動を行なっている。

東員町人権教育担当者会で、

- ・自分の思いを通そうとする。
- ・困ったことを自分から話すことができない。
- ・自分の思いを言葉で表現できない。

といった、幼稚園・保育園での課題を聞いた。

また、小学校に入学する直前の「保幼小連絡会」で、

- ・基本的生活習慣作りを呼びかけてきた。
- ・遊びの中で関わり合いができるよう声をかけた。
- ・個々の課題を克服するようにしてきた。

と、神田幼稚園・東員保育園からの申し送りを聞いた。

自分の思いを伝えたり、周りの子の思いを聞いたりする力が弱いことが課題であり、スムーズに小学校生活がスタートできるよう、園で取り組まれていることが、伝わった。

小学校では、園とは違った学習習慣や学習に向かう姿勢が求められている。子どもたちの学びが豊かになっていくには、園でのやり方を踏まえて少しずつ小学校のやり方に慣れさせていく1年生での小学校入門期における

指導が重要である。

また、「通常の学級に在籍する知的発達に遅れはないものの発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒⁽¹⁾」の数値を見ると、小学1学年で学級の9.8%在籍するとされている。小学校平均の7.7%より高く、全学年の中で一番多い。実感的にも、一般的に言われる「気になる子」(特別な支援が必要な子)が1年生で年々増えていると感じている。

小学校生活がスタートするに当たって、園での生活の様子や家庭環境の面では園の指導者から聞いても、学力の面では、授業をしばらくしてみないと分からない。

秋田喜代美は、『『学びに向かう力』とは、自分の気持ちを言う、相手の意見を聞く、物事に挑戦する、自分の気持ちを調整するなどの力で、生涯にわたる学びの基盤になる力を指します⁽²⁾』と定義している。

幼稚園・保育園での課題は、「学びに向かう力」という点で小学校でも当てはまると考えられる。

- ①自分の気持ちを言う
- ②相手の意見を聞く
- ③周りの子と協力する
- ④集中して取り組む

これら4つの姿勢を、1学年で身につけていきたい。

小学校での学びの中で「気になる子」も成長していくように、幼稚園・保育園とは違った、意図的な実践で、「学びに向かう力」を育てていきたい。

2 「ペア学習」を取り入れた授業スタイル

(1)「ペア学習」のねらい・方法

2012年度、伊藤は1学年を担当した。子どもたち同士で学び合えるように、1時間の授業を3つの場面に分けて進めた。

1) 員弁郡東員町立神田小学校

2) 三重大学教育学部学校教育講座

- ①活動 …学習課題について、個人で考える。
- ②協同 …ペアで相談して、自分の考えを確かめる。
- ③共有 …学級場で意見を出し合い、考えを深める。

これらの中で、1年生で特に重要視しているのが、②協同の場面での「ペア学習」である。

「ペア学習」を通して、自分の考えに自信を持ったり、相手への伝え方を練習したりしながら、話す力・聞く力を高めることをねらっている。また、ペア同士で親しくなることを期待している。



上記の写真は、ペアを活用した授業の場面である。教科書を2人の間に置き、自然に顔を寄せ合ったり、体を向け合ったり、指し示したりしながら、学習をしていた。ペアで学習することを楽しみながら、学習内容を理解したり、表現する力を高めたりすることをねらっている。

ペアで学習するメリットは、以下の6点である。

- ・自分の考えを表現しやすい。
- ・相手の意見を聞きやすい。
- ・授業時間内に、全員が発言できる。
- ・意見のやり取りをくり返すことで、考えが深まる。
- ・教師が、支援の必要な児童に寄り添って援助しやすい。
- ・分かった子が分からない子に教え、支え合う場になる。「分からない」と言いやすくなる。

ペアの組み合わせは、子どもたちの活動が深まるように、教師が意図を持って以下のように作っている。

- ・1年1学期は、同性同士の遊び友達を作りやすいように、同性のペアにする。
- ・2学期当初は、運動会での活動が深まるように、同じ縦割りの色でのペアにする。
- ・その後は、男女の関わり合いが増えるように、異性同士のペアにする。
- ・話すのが得意な子と不得意な子と組み、支え合いができるようにする。
- ・特に教師の支援が必要な子は、前の方の席にする。
- ・いつも後ろの席にならないように、配慮する。

ペア学習をする際、次の手順で進めている。

- ①ペアで椅子を向かい合わせる。
- ②ワークシートを真ん中に置く。
- ③先に話す順番を指定する。
- ④時間を設定し、お互いに話し合う。
- ⑤相手の話を聞く時に、顔を見て反応（うなずく・相槌を打つ・首をかしげる・感想を言う）する。

どの教科学習・学級活動でもペア学習を取り入れているので、少しずつスムーズに進めるようになっていく。

(2) 充実した「ペア学習」ができるための工夫

ペア学習をどの教科でも取り入れているが、言語活動と最も関連した国語の場合で、工夫していることを考える。

例えば、国語「たぬきの糸車」(3学期の実践)では、以下の5点について工夫の手立てを考えた。

①昔話の状況をつかませる。

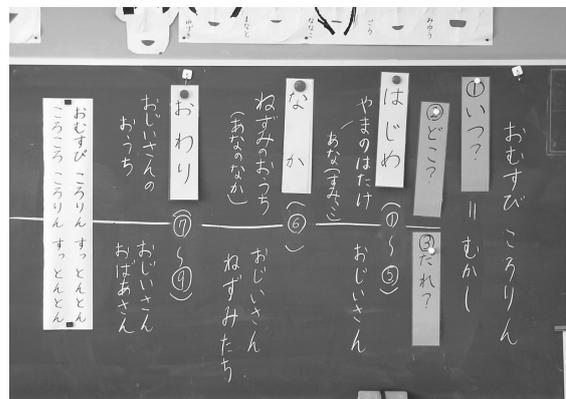
- ・図書室の「昔話の本が置いてある場所」を紹介し、読書活動を薦める。
- ・糸車の実物を紹介し、具体的なイメージを持たせる。
- ・言葉の意味を裏に書いたカードを繰り返しさせ、語彙を増やすために具体的に覚えさせる。

②数多く音読をさせ、正確な読みの力を育てる。

- ・ペアで音読を聞き合い感想を言い合う場を繰り返す。
- ・動作化をして、読みを確かめる。

③観点を元にして読み取り、読みの共通土台を作る。

- ・「いつ」「どこ」「だれ」「ちゅうしん」の観点を確かめる。
- ・教科書を見ずに、挿し絵を順番に並べさせて、話の概略を確かめる(アニメーション)。
- ・話を「はじめ」「なか」「おわり」の三つに分け、学習課題を設定する。



④学習したことを目に見えるようにする。

- ・自分の考え(たぬきの内言)をワークシートに書き、ペアで交流しやすくする。
- ・書画カメラやデジタル教科書を使い、クラス全体で説明しやすい環境を作る。

- ・読み取ったポイントを教室に掲示し、学習を振り返る環境を作る。

⑤ペアで活動する場を多く持つ。

- ・掲示している「聞く時の約束事」を、繰り返し求める。
 - ①目を見る ②うなずく／かたむける ③反応する
- ・ひらがな学習が終わる6月から『ペア学習』での会話文型を使い、ペアでの話し合いを継続する。

「ペア学習」での会話文型	
①「話していいですか？」	→「いいです」
②「わたしは（ ）だと思います」	→「はい／同じです／にしています」
③「なぜかと言うと、（ ）」	→目や資料を見て聞く
④「どうですか」	→自分の言葉で反応する

3 1 学年国語の授業で見えてきた子どもたちの姿 ～「学びに向かう力」を伸ばすために

2012年度、東員町立神田小学校1年C組(27人)で、2つの校内研究授業を行なった⁽³⁾。両日とも、事後に校内で検討会を行なった。

2つの研究授業と関連して、三重大学教育学部で2回の検討会を行なった⁽⁴⁾。

4回の検討会の中で、授業者が気づけなかった「ペア学習」での子ども様子を、聞くことができた。①授業者が捉えた姿 ②参観者から聞いた姿 ③授業ビデオで見た姿 の3つの事実から、授業を分析していくことにした。

(1) 動作化で「やってみたい」という思いを高める

「おむすびころりん」のはじめの場面で、「2つ目の『おむすびころりん すっとんとん』をおじいさんがどうやって聞いていたか」を考えさせた。

ペアで考えさせ、クラス全体の場で話し合った。言葉だけのやり取りだったので、イメージがつかめたかどうかははっきりしなかったため、動作化をさせた。

まず、黒板の前に出させ、「かご」を穴に見立てて、一人が動作化をし、他の子たちはその場面を音読させた。

まだ様子をつかめたかどうかははっきりしない読みだったので、「吹き出しカード」を穴に見立てて、全員に動作化をさせた。

すると、穴をのぞきながら読んだり、手でおむすびを転がす動きをつけたたり、穴に耳を近づけたり、にこにこした表情になったりして、楽しそうに読んでいた。

次に、「3つ目の『おむすびころりん すっとんとん』をおじいさんがどうやって聞いていたか」を考えさせた。

中心人物の変容について考える学習課題が2つ続いた

が、2つの課題の間に動作化したことで、マンネリな授業の流れにはならなかった。

動作化を取り入れたことで、3点の良さがあった。

1つ目は、考える意欲がわいてくることである。体を動かしながら読むことで、子どもたちは、楽しい雰囲気の中で音読をしていた。

2つ目は、テキストを吟味していることである。デジタル教科書を指し示しながら、言葉にこだわり、教材文に戻って考えていた。

3つ目は、授業でリズムが生まれたことである。一人で読むのとは違って、みんなで何回も読む面白さがあった。

子どもたちが、「やってみたい」と思える状況を作ると、課題を考えるために自然と教材文の言葉を元に考えることができた。

(2) ペア学習の土台に、どのようにのせるか

ペア学習でのねらいは、個々の思考を高めることである。ペア学習をする前に、個人の考えを持つ時間を設定している。1学期は書くことに慣れていないので、登場人物の挿し絵に「ふき出し」の形のカードを置かせて考えさせた。2学期は、ワークシートに考えを書かせた。

個人の考えを持つ際、①考えを書ける子 ②考えはあるが書けない子 ③考えがなくて書けない子 ④ペアで話しながら考えが浮かんでくる子 と、個人差がある。

考えを持っていない子に対して、教師が机間指導をしつつ、粘って一人で考える機会に慣れていくことを期待する。教師ができなかった個別指導を、ペアで深めていける。

「おむすびころりん」での学習課題

- ①二つ目の「おむすびころりん すっとんとん」を、おじいさんはどうやって聞いていましたか。
- ②三つ目の「おむすびころりん すっとんとん」を、おじいさんはどうやって聞いていましたか。

「たぬきの糸車」での学習課題

- ①おかみさんは、何と言ってたぬきを見送ったと思いますか。
- ②なんでたぬきはうれしかったの？たぬきは、なんと言いながら帰っていったと思う？

単元の第二次の段階で、中心人物の変容について考える学習課題を設定し、「学びのスタイル」をとった。ペア学習では、4分間時間をとったが、それぞれのペースで話し合いが行なわれていた。数多くのペア学習から、4つの事例を挙げる。

【事例1】活発な話し合いをするペア

「おむすびころりん」でのペア学習で、A子とB子は、交互に話し続け、同じような内容でも4分間話して

いた。A子は全体の間では挙手できなかったが、1年1学期の時期なのに、意欲的に対話を楽しんでいた。この意欲が、「たぬきの糸車」での創造的な動作化つきの音読につながった。

【事例2】話すのを支えるペア

「たぬきの糸車」でのペア学習で、C男は、一言も話せないD男に「楽しい」をイメージする別のことを例えて伝えようとした。D男は、ペア学習では一言も話せなかったが、動作化した音読では、にこにこしていた。

C男は、考えを持ってなかったE子にも「一緒に考えよ」と声をかけていた。C男は、相手も話せるよう、自分からやさしく声をかけ続けていた。

【事例3】話し合いで固まる子

F男は、11月まではわからないことがあると思いが滞るようであったが、「たぬきの糸車」でのペア学習では、わからないことでも少しは話そうとしていた。学習スタイルに、少しずつ慣れてきた。

【事例4】考えを持つことが苦手な子

G男は、「おむすびころりん」の最初のペア学習では、相手の子に促されながらも全く何も言えなかった。2回目のペア学習では、顔つきが変わり、相手の子のお話をよく聞いていた。全体で話し合う時に挙手したので、一番に指名した。指名された時の顔は、発言できる喜びで満ちた表情をしていた。次第に、意欲が出てきた。

「たぬきの糸車」でのペア学習では、活動の時間にワークシートに考えを書くことができたが、ペア学習では話せなかった。隣の女の子に積極的に声をかけてもらっていた。ペアの子と共有しようという気持ちがあり、自分の考えに自信がつくまで時間がかかっていた。

これらの事例から、ペア学習には大きな3つの成果があると考えられる。

1つ目は、教科学習の目的に照らしてである。事例1では、相手の考えを聞き自分の考えとつなげて話が展開した。話すのが得意な子と苦手な子とがペアを組んでいるが、話したい内容を共有できたり相手と話したいという思いが高まったりすると、議論が深まりやすい。

2つ目は、生活指導の目的に照らしてである。事例2・3・4では、2人で話し合うことによって学習内容が深まったとは言えないが、「考えを持っていない子・話すのに慣れている子」と「考えを持っていない子・話すのが苦手な子」がお互いのことを思いやって話したり聞いたりしている。コミュニケーションスキルを学び、将来の学習の深まりにつなげる学級集団の素地を作っていくものである。

3つ目は、自己肯定感を高めるという目的に照らしてである。全体に考えを出す前にワンステップ置くことで、G男のように自分の考えに自信を持って全体に出せる。

学習内容の理解の面で考えると、1つ目の教科学習目的がメインであると考えたいが、小学校入門期の児童は、自分の考えを持つこと自体に慣れていない。ペア学習の場をくり返し経験することで少しずつ慣れていく。個人の考えを持ってからペア学習に望むのが本来だが、活動の時間に教師がすべての子どものそばで支援することはできない。子ども同士の学び合いの過程を活用しながら学級集団作りを進めていくことが、小学校入門期では必要だと考える。

そのためにも、ひたすらペア学習の機会を多く持ち、ペア学習が楽しいと思うような課題を設定したい。

国語での基本は、音読と言われている。単元の中で、ペアで音読を聞き合い、感想を言い合う場を繰り返す(音読対話の基礎)場を大事にしていきたい。

(3) 発言の仕方を、どのように定着させるか

教科書本文を書画カメラで映すと、子どもたちは大型テレビの前に来て、指示棒を持って説明を始める(1年の教科書は、ページをめくるごとに工夫がされている)。



話し合いの仕方が定着するように、6月に『ペア学習』での会話文型』を提示して教室掲示した。日常的に使う場面を多く持ったので、【考え】→【理由】の順に話すことに慣れ、この文型をよく使って発言していた。

「() だと思います。」
「なぜかと言うと、() 。」

論理的な構造を教えるために、まずはパターンを教える手法をとった。だが、正確に使いこなしているとは言えない場面があった。

【子どもの発言記録】

おじいさんは、同じ歌が聞こえるから、もう一回(おむすびを)落として、もう一回聞こえるから、楽しもうとして、もう一回入れたと思います。

「周りの子から、「わかりました」の反応がある」
でも、理由は言えません。

【子どもの発言記録】

このおじいさんは、歌が面白くて楽しかったから、もう一回わざと言ったんだと思います。

〔周りの子から「理由を言ってください」のつぶやきをうけて、しばらくしてから次の言葉を言う〕

なぜかという、このおじいさんは、この歌が楽しい歌で、おもしろかったから、2個目のおむすびを入れたんだと思います。

〔周りの子から「わかりました」の反応〕

一人目の児童は、「なぜかという」という言葉を自分で使っていなかったため、理由を言っていないと自分で判断していた。

二人目の児童は、最初の一文で理由を言っているのに、周りの子から「理由」を言うことを求められ、「なぜかという」という言葉を使って、言い直していた。

いずれの場合も、「理由」を話してから「考え」を言ったのに、言う順番が逆だったので、「理由」を言っていないと考えている事例である。

子どもたちは、内容を分析的に聞き取っているのではなく、形式に当てはめて聞き取っていた。【考え】→【理由】の言い方だけでなく、【理由】→【考え】の言い方と比較させて吟味させる必要があった。論理的な構造の意味を理解しているかどうか、振り返る場を作ることが必要であり、試行錯誤しながら身につけていくものである。

しかしながら、1年生の7月の時点で、考えた根拠を大事にしようとする姿勢が定着していたのは、驚いた。

逆に、教師が日常的に子どもたちへの会話で使っていた「ナンバリング」の言い方を、子どもたちは自然と身につけていた。

「○○○の理由が、()つあります。」

「1つ目は、()。」

「2つ目は、()。」

これは、思考の整理ができていない言い方であり、直接的に話型を提示して指導していなかった話し方を子どもたちが使いこなそうとした姿に驚きを感じた。

4 「学びに向かう力」を伸ばす1年国語の授業

園生活から学校生活へ移行するに当たって、様々な大きな環境の変化がある。1年生の大まかな目標は、「小学校生活に慣れる」ことだと考える。

幼稚園で成長したことを受け、小学校の学びへ移行するにはどんな観点で指導すればいいか、国語の授業の場で考える。

(1) 「やりたい」思いを大事にする

幼稚園・保育園では、遊びの中で様々な体験を通して学んでいる。例えば、日常の遊びの中で、友達と仲直りしたり協力したりルールを工夫したりすることを学んでいる。竹馬遊びでは、集中して取り組んだり難しいことにチャレンジしたりする気持ちを学んでいる。夏祭りでは、自分がしたい店を考えたり説明したり招待したりと、相手を意識する必要性を学んでいる。

これらのように、幼稚園・保育園では、身体的・感覚的な学びを行なっている。

小学校では、授業の中で様々な学習活動を通して学んでいる。例えば、国語の授業では、語彙や作者の主題・言葉での表現方法などを学ぶ。算数の授業では、数や図形概念などを学ぶ。体育では、走力・柔軟性・持久力などを身につける。

これらのように、小学校では、言語的・自覚的な学びの要素が増えていく。

この2つの学びの違いを意識し、言語的・自覚的な学びに慣れていくことが、1年生の時期に必要である。

身体的・感覚的な学びから、言語的・自覚的な学びにつなげる意味で、国語での動作化が効果的な手法である。

「おむすびころりん」の事例では、教材文の内容を言葉だけで追うのではなく、動作をつけることで、体全体で登場人物の心情に迫っていた。楽しい雰囲気の中で、学習に対する意欲が高まった。

いきなり「できる」ことを求めていくと、結果ばかりに意識が向き、学ぶ楽しさ・自主性を育てることができない。「できる」ことより、「やりたい」思いを大事にし、やりたい思いが実現した達成感を味わえるような、肯定的な学習体験⁽⁵⁾を大事にしたい。

(2) 話を聞いてもらう場を設定する

幼稚園とは違い、45分間教室の自分の席に座り、話を聞いたり意見を言ったり考えを書いたりすることが、求められる。学習環境が大きく変わるので、自分の思いを表現しにくくなりがちである。この環境変化に対応するために、ペア学習を取り入れている。

【事例1】のように、ペア学習に慣れ、自分の考えを聞いてもらえることでうれしくなり、相手の考えもじっくり聞けるようになる。「話を聞いてもらって気持ちがいい」実感を味わっている。

【事例3・4】のように、自分の考えを持てなかったり自信がなかったりすると、表現できずに固まってしまう。このような状況の時に、【事例2】のC男のような関わりを受け続けると、少しずつ表現できるようになっていく。C男がこのような関わりができたのは、「話を聞いてもらって気持ちいい」という実感を家庭でも経験しているからである。

話を聞いてもらう活動を設定することで、自分から表現したり、周りの子と関わったりする意欲を持つようになる。

(3) 言葉や表現方法に慣れる・こだわる

物語文を論理的に読み解く力をつけるために、白石範孝は、三つの土台が必要だと考えている⁶⁾。その中の第一の「さまざまな学習用語を知る」段階として、1学年で以下のように計画的に指導した。

扱った単元名	指導した学習用語
はなのみち (1学期)	「いつ」「どこ」「だれ」 「中心人物」
おむすびころりん (1学期)	「はじめ」「中」「おわり」
おおきなかぶ (1学期)	「場面」

初めは用語の意味と異なる発言もあったが、くり返したずねることで、学習用語の意味を理解し、使いこなしていた。

1年生でも、用語を使って考えたり話したりすることで、学習内容の理解も深まる。次第に話し合いの中で自分から必要な情報を取り出す力がついていく。

子どもたちの表現の良さを広めることが、一番スムーズに定着していく。時には、発言のパターンも教える。くり返すうちに、自分たちでより良い表現方法を身につけていく。

小学校入門期には、説明してすぐ理解できることは多くない。初めての概念が多く出てくるので、基本的なことを少しずつ、くり返し定着するまで、時間をかけて学習していくことが、「学びに向かう力」育てる元になると考える。

5 終わりに

伊藤幸洋教諭は三重大学教育学部41期生(1993年度卒業)であり、本実践を実施した2012年度で小学校教師歴20年のベテランである。在職した小学校は東員町立神田小学校で4校目となる。その間三重大学大学院教育学研究科修士課程も修了された。

20年の教師歴の前半には高学年担任が多かったと聞くが、神田小学校に来て低学年も担当するようになった。

佐藤は2010年1月21日に伊藤が担任する神田小学校1年A組の国語「どうぶつ赤ちゃん」(説明文)の授業を参観し、また2012年7月4日に1年C組の国語「おむすびころりん」、2013年2月20日に同クラスの国語「たぬきの糸車」と、いずれも文学作品の授業を参観した(なお、2011年度にも同教諭の4学年国語説明文の授業を参観している)。

佐藤が三重大学教育学部に赴任してまもない1990年

代前半期以来、本学部教員、現職派遣院生、全国団体「授業づくりネットワーク」会員の教員などと共に「三重授業づくりサークル まんぼうの会」を結成して今日に到っているが、伊藤もその初期からのメンバーである。

伊藤が2010・2012年度に1学年を担当したため、「まんぼうの会」でも国語を中心とする伊藤の1学年授業実践を検討する機会を何度か持った。その中で両名は、小学校期、さらに言えば学校教育入門期であることを意識しての国語説明文・文学教材の授業研究や学習指導・学習集団指導研究のおもしろさに気づくに到り、2012年度には継続的な共同授業研究を行なった。

いま残念ながらこの共同研究の理論上の成果と課題をここで整理するだけの紙数がない。しかし、伊藤による実践の自己分析の中に、サークル「まんぼうの会」での佐藤及び数名の小学校教員を含めての検討の成果が反映されているので、そこを読み取っていただくことを期待したい。

両名は今後も共同の授業実践研究を継続したいと考えている。

【 註 】

- (1) 文部科学省『通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について』平成24年12月5日の中にある、「表6 質問項目に対して担任教員が回答した内容から、知的発達に遅れはないものの学習面、各行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の学校種、学年別集計」に、データが記載されている。
- (2) 「ベネッセ次世代育成研究所 幼児期から小学1年生の家庭教育調査(2012)」を、秋田喜代美が分析している。
- (3) 1回目は、2012年7月4日(水)に、国語「おむすびころりん」を行なった。2回目は、2013年2月20日(水)に、国語「たぬきの糸車」を行なった。
- (4) 1回目は、2012年8月10日(金)に、「おむすびころりん」の振り返りとして、授業ビデオのストップモーション検討を行なった。2回目は、2013年1月6日(日)に、「たぬきの糸車」の教材研究・指導案検討を行なった。
- (5) 伊藤幸洋・佐藤年明「肯定的な学習体験を持てる算数少数人数教育」『三重大学教育実践総合センター紀要』第25号 2005年
- (6) 白石範孝編著『3段階で読む新しい国語授業』文溪堂2011年 13頁 三つの土台として、①さまざまな用語を知る ②方法を知る ③原理・原則を知ることなどを挙げている。これら三つの力の習得・活用することで、「読解力」を高める授業づくりを具体化できると考えている。